

一千万分の一の涙

由比和子

特別養護老人ホームひかりの食堂はガラス張りだ。それは玄関の方に面しているため、車や人の出入りする開け放たれた門、その先の道を挟んで水田が見えた。

だから、食事中は門の形に切り取られた水田を見るのが砂木子の唯一の楽しみだ。

今は、田植えを終えたばかりで水を張った中にちよこんと顔を出した苗たちが時折微風にゆれている。きつと今ごろの風はもわつと生温く、水の匂いを含んでいる。

砂木子は、流動食をすくうスプーンの動きが止まったまま、気持ちにはガラスの向こうを飛んでいる。田圃をすぎ、山々を越えて、我が家へと続く道の上をさまよっている。

「また外を見ながら何か夢想してありますね。食事が冷めてしまいますよ」

介護士の待田君まちだが傍に来て話しかける。経験の浅い彼は時間内に終えて貰うことばかり気にして、毎回食事の進み具合をチェックする。

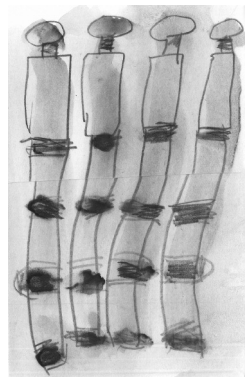
「ああ、ごめんなさい……」と、砂木子は周章あわててスプーンを動かす。

ほうれん草のどろりとしたもの、みそ汁、ごま豆腐、里いもをつぶしたものと、流動食が次々と砂木子の舌にのせられ喉元をすぎていく。既に冷めきっているゆえ味は落ちている。結局半分は残してしまふ。

「そういえば、最近娘さんお見えになりませんね。淋しいですね」

待田君が温かい茶を置きながら、砂木子の表情を窺う。

「娘も忙しいだろうよ」



一口茶をすすると、湯飲みをもてあそびながら砂木子は溜息をついた。

二年前、二度目の骨折で入院し治療を終え、しばらく娘のところに行ったが、孫の出産が重なり、もう砂木子のめんどうは看きれないと、家から離れたこの老人ホームに入らざるをえなかった。一年前のことだ。

確かに、初めの頃はよく来てくれたのだが、最近は全くといっていいほど顔を見せない。娘は体が丈夫でない上に、自分の仕事と孫の世話が重なり大変なことはわかっている。そんなことより、「家に帰りたい……」とぼやく。たびたび聞かされる愚痴に、若い待田君はおろおろするばかりだ。「戻っても、どなたもおられないのでしょうか？ 家は確か農家でしたよね」

待田君が、砂木子の曲がった節太の指を見て言った。「そうよ。主人は会社員だったから、主に私ひとりです。やってきたとよ。定年退職してからは一緒にしていたけど、五年前に主人が亡くなって、それから近所の人に田畑を貸している」とよ」

「そうでしたら、尚更帰っても仕方ないでしょ」いつもの同じ返答をしながら、僕を困らせないでくださいよと言いたげだ。待田君は、茶を飲み終えた砂木子の車椅子を、食堂と地続きになった部屋へさっさと押していく。

そして、これれ物を扱うようにゆつくりと、砂木子のすつかり肉のそげ落ちた体を車椅子からベッドへ移す。

介護士にとって、骨折をくり返した入居者は、また場合によっては骨折しかねない超危険な存在なのだ。ベッドに寝かせ、砂木子の背中の下になった逞しく大きな腕をゆつくり抜くと、待田君はほっとした息をもらす。

次に手際よく入歯を外し、洗面所で洗い、容れ物に収納する。最後はおむつ替え。これだけはいつまでたっても慣れない。目をつむって耐える。

「何かあったら手元のベルを押してくださいね」と言って待田君は去っていく。

褥瘡を防ぐために、夜二回体を横向きにするために介護士がやってくる時以外、砂木子はベッドでひとりだ。

結局、自分は感情はあっても動けないならば物でしかない。自分の意志で自由に動いてこそ人間なのだ。あるいは、つきつきりで自分の意志通り動かしてくれる人が傍にいたら人間としてやっていけるのだ。

ああ、このままここで朽ち果てていくのか。このまま自分の希みを押し殺し、人形のようにおらねばならないのか。せめて、一度でよい。家に帰りたい。そして自分を取り戻したい。今はそれだけが希みなのだ。何とかならないものか。

今夜も眠れない。夜が明けても、また何の希望もない一日が始まる。最早死した人間だ。砂木子は天井を見つめたまま、眠れない夜がすぎるのを待つ。

朝方やっと眠りに落ちたが、すっきりしない頭のまま砂木子は食堂にいる。全く食欲がなく、更に人參の目にも鮮やかな流動食に違和感を覚えて、スプーンの動きは止まったままだ。

「砂木子さん、食べないと元気出ませんよ」

待田君が話しかけてくる。

「元気になるには家に帰ることしかないよ」

ついで、つっぱねるような口調になる。二十代の待田君には言いやすい。

「え、大きな声出して、元気いっぱいではありませんか。何回も言うように、家に戻っても待つご家族がないならば無理ですよ。娘さんもこっちだし……」

「そこを何とかお願いよ。私、このまま食わずに干からびてしまうことになるよ」

「そう言われても……」

スプーンを置いたままの砂木子に待田君はおろおろしている。砂木子は若い男を困らせてちよつと気分がよい。

「ホーム長に相談してみます。だから少しでも食べてく

ださい」

待田君は小走りに去っていった。

ここは駄々っ子となって通すしかない。老人は最早、聞きわけのない子どもなのだ。

しばらくして待田君がホーム長を連れてきた。ホーム長は最近替わったのか高齢の太った女だ。ホーム長は、入居者と同じ視線を心がけているのか、テーパーを挟んで真向かいに腰を下ろした。

「お名前は日野砂木子さんでしたね。あなたのことは常々待田君から報告をうけ、よく存じ上げておりますよ」

ホーム長の丁寧な対応に、入居者はお客様なのだと砂木子は認識する。ホーム長は砂木子の目を真っ直ぐに見て話を続ける。

「あなたのお家うちに帰りたい気持ちは痛いほどよくわかります。ここにいる方々は皆そうです。でも、もう皆さん諦めておられる……」

そもそもここへ来た理由は、諸々の事情でご家族がめんどうをみきれない。言葉は悪いですが、家族から見放された形でいらっしやる。また、入居者自ら家族に迷惑をかけたくないと、入ってこられる方もあります。

よくご自分の立場をお考えになって、ここで平穩にすごすようにされた方がいいと思いますよ」

ホーム長の抑揚をつけた舌鋒は説得力があったが、そんなことはわかりきっていると、砂木子は内心思う。

「あの、私はここで死ぬまで平穩にすごしたいとは思いません。もう一度自分を取り戻したい。そのためには自分の原点である家に一度帰ってみたい。そこから、どうするかは今のところ何もわかりません。ただ、今のままでは耐えられないのです」

砂木子は一気に話すと、指で涙を拭いた。とめどなく涙があふれてくる。ホーム長の視線が砂木子に注がれている。

「ホーム長、砂木子さんは諦めない人です」

突然、待田君が砂木子よりのことを言ったのが意外で、砂木子は次の更なる言葉を待った。

「少なくとも、このままだったら砂木子さんは精神を病んで、その内にうつ病でも引き起こされたら、もう対処のしようがありません。現に食も段々細くなって、今朝はほとんど召し上がっていない状態で……。心配です」

思いがけず味方がついて、すかさず「ホーム長、何とかお願いします」と砂木子は深く頭を下げた。

「仕方ないわね。特別に一泊二日許可します。特別仕様車として、施設の車を一台貸します。費用は娘さんの春子さんに相談してもいいですね」

「はい、娘に通帳を渡しておりますので大丈夫です」

「あら、砂木子さん、目が光っている」

ホーム長は砂木子の変化を見逃さなかった。

「つきそいは、待田君、あなたにお願いしますよ」

ホーム長は腰を上げて待田君に近づいた。

「え、私ですか？」

待田君は戸惑いをかくせない。

「まだまだ気持ちが入っていないから、いい勉強になるでしょ。砂木子さんに寄り添って学びなさい」

ホーム長の命令口調に待田君は観念する。

「わかりました。それで食事は流動食持参になると思いますが、入浴はどうしますか？」

ちよつと不安に思ったことを待田君が尋ねてくれる。

「同じ系統のあちら方面のホームに、入浴と昼食の件、対応してくれるようお願いしておきます」

「ご迷惑をおかけします」と言いつつ、この機会を無駄にはずまいと砂木子は思った。

「じゃ、車手配しとくから」とにっこりしてホーム長は去っていった。

「ホーム長は何歳かしら？」

砂木子は気になることを訊いた。

「八十代ですよ。最近だんな様が亡くなってから継いでおられるのですよ」

「そう、私とあんまり変わらないね」

どうして、こうも同年代で違うのか、負けられない。一歩でもホーム長に近づきたいと砂木子は思った。

数日たって、待田君が、「車の準備ができたので明日出発します」と告げる。

「当日朝の内に入浴をすませ、おむつや食料を積み込みますよ」

「食料とは？」

「流動食ですよ。保冷庫に入れておけば二日はもつでしょう。それから介護用ベッドは家にあると言ってありますね」

「はい、義母ははが使っていたの、まだそのままです」

「それでしたら安心です。私は準備があるので行きます」
「明日はよろしくね」と砂木子の声を背にうけて、待田君は風のように去っていった。何故かはつらつと見えた。砂木子もうきうきして、その夜は子どもの時の遠足のように気持ち昂った。

次の日、砂木子は介護専用車の中にいる。車が門の外に出た瞬間、それまで門の枠内でしか見えなかった水田が両側の車窓に広がった。たつぷりと水を引き入れた田の面は、青い空と綿をちぎったような雲を映していた。砂木子は眩

しさに目をしばたいた。

「待田君、窓を開けてくれない？ 風に当たりたいかとよ」

「はい、開けたよ」

窓が開くのと同時に待田君の乱暴な言い方が気になったが、すーっと入ってくる風は気持ちよかった。風は色々な匂いを含んでいた。水の中の生き物の生臭さ、山のももことした緑の清涼感、先の町中から流れてくる人いきれ、砂木子は大きく息を吸い込んだ。生き返るようだった。

ふと、運転席のミラーに映った待田君の顔が目に入る。

むつとしていている。きつと急に、体の動かない年寄りの世話をひとりでこなすことに、仕事とはいえ嫌気がさしたのかもしれない。確かに無理を言っつて迷惑をかけたのだ。こつちから歩み寄るしかない。

「待田君、ご家族はいるの？」

とりあえず、砂木子は怒ったような肩に話しかけた。聞こえたのか聞こえなかったのか、ミラー越しの待田君の顔は無表情だ。

もう一度訊いてみる。口角が少し上がる。

「家族ですか？ 父だけです。両親は私が小学生の時離婚しましたから」

いけないことを訊いたと思つて、砂木子は口をつぐんだ。家族の話はしまいと自覚した時、待田君の方から話の穂を

つなぐ。

「砂木子さんという名前、珍しいですね」

「父がね、砂の上でも育つような木、要するに遅く生きようにとの願いをこめてつけたらしいけど……、私、弱い……」

「弱いどころか、砂木子さん強いですよ、ご自分の意志を通されるから」

「意志というより我がままね……。待田君の下の名は何というの？」

「幸一、しあわせ一番ですよ」

「幸一こそ、いい名前じゃないの」

「でも思うのですよ。親は初め、子どもの幸せを願って一生懸命に考えて名前をつける。その後が無責任ですよね。勝手に離婚するのだから」

「こういう事情でご両親が離婚されたかはわからないけど、どこの夫婦もつきつめれば離婚よ。必ず不満はある。皆諦めてるのよ」

「え、そうですか。でも父なし子にしたいから離婚だけはしまいという母親もあるわけじゃないですか」

「どうしても母親は子ども優先に考えるから一般的にはそうね。だけどお母さん、余程我慢できないことがあったのね」

「そうですかねえ。表面上はわからなかったけど……」

人は色々なものを抱えて生きている。表面ではわからないものだ。夫婦だつていくら年を重ねてもお互いに何を考えているのかわからない部分がある。

車はいつの間にか市内の大通りを走っていた。窓から車の喧騒や排気ガスの匂いが入ってくる。窓から車

「窓、閉めましょうか」

待田君がミラー越しに訊いた。

「このままでいいよ。歩いている人を見るの楽しいし、食べ物のお店から匂いが伝わってくる。今、目や鼻がびっくりしているよ」

「砂木子さん、面白い人ですね」

待田君が初めて笑った。一重の目が更に細くなった。

「待田君こそ立派な若者だよ。お父さんからしっかり育てられたのやね」

幸一君と言おうとして、やはり待田君にする。

「まあ、ぐれはしなかったですけどね。私、本当は音楽やっついて、バンドでドラムたたいいたんです。三年前に父が心筋梗塞で倒れてから、働らかざるをえなくなつて、やむなく介護の職についているのですよ」

「あら、そうだったの……」

この青年の夢は潰つぶえていたのか、と砂木子は淋しい気持

ちになる。

「もうすぐ高速に入りますよ。途中サービスエリアでおむつ替えますからね」

つい、ドラムをたたく待田君の姿を想像していた砂木子は現実を引き戻され、ミラーに映った介護士としての彼の顔を見たのだった。

「そう、でもまだ大丈夫よ」

一回排尿したが不快感はなかった。それに容易に想像できたことであつたが、車の中でおむつ替えとは、何かとても恥ずかしかつた。

「そうはいかないでしょ。そこをすぎたら、お家まで止まることはないですよ。ついでに、私の昼食の弁当を買うつもりです」

待田君は介護士の職務をこなさなければならぬ。弁当を買うから、いずれにしてもサービスエリアに寄る必要がある。

「待田君の都合の良いようにしてね」

そう言うしかない。

「隅の方に止まって、横にある簡易ベッドで替えますからね。外からは絶対に見えませんかから大丈夫ですよ」

待田君がミラー越しに砂木子に笑いかけた。

ああ、せっかく若い男といるというのに、して貰うこと

といえはおむつ替えか……。情けない。せめて介護なしであれば、どんなに楽しいことか。

車は高速道路を走っている。防音壁の間から町並が見える。スーパーやホテル、民家など、健康な人々の生活の拠点が砂木子の目には新鮮だ。

はるかあなたには山々が横たわっている。きっと朝日の昇る方角だ。我が家から見える夕焼けも美しいが、朝焼けも紫色の雲がたなびいて荘厳なはずだ。

砂木子はこの際見てみたいと思つた。これが生きるということだ。

自立した生活から隔絶したところ、いわば半分は黄泉の国へ足を踏み入れた形であるが自分は生きています。体は動かないが心臓の動きと同じように心は躍動している。

さつきから車内に音楽が流れている。どこかで聴いたよな歌だ。

「この歌、何というの？」

「『糸』ですよ。結婚式の定番ですね。この歌詞からすると、人との出会いは必然的なものですかね」

「今までそういう出会いがあったの？」

「そうですね。母さんと会いました」

「まあ、お母さんと？」

「前の職場で、母さん、調理の仕事をしていました。大きなお鍋かかえて汗流して毎日働いていました」

「こちらから名乗ったの?」

「いいえ、母さんの方から。不倫をしたのだと告白してくれました。ずっと私のことが気掛かりだったと。こうして偶然に会ったのも会う必要があったのだと話していました。その後、不倫相手ともうまくいかず、今はひとりだと、罰^{ばち}があたったとも言っていました」

「両方失ったということね」

よくある最悪の結果だ。

「それで、お母さん、あなたに謝ったの?」

「はい、悪かったと、泣いて謝りました。でも父さんにも何か原因があったのかもしれないとも考えたのです」

「待田君、すごく冷静ね」

「だって、私もう二十九ですよ。小中学生ならまだしも、それに音楽があつたから生きてこれたのです」

「自分のこと、僕とは言わないし、大人なんだね」

「仕事上は私で通しています」と言った後、「サービスエリアに入ります」と告げた。

とうとうおむつ替えか、もう何回もしてきて貰っているというのに、何故かとても恥ずかしい。嫌だ。だが、そうも言つてはおれない。さっき二回目の排尿をした。

待田君が大きくハンドルを切りながら、広い駐車場の隅の方に車を止める。すぐに車から降り、後部扉を開け入ってきた。ゆっくりと砂木子のおむつ替えをした。下ろし、いつも通り手際よくおむつ替えをした。

これが尿だからまだよいが、大便となると大変だ。老人ホームでは当たり前だったが、一旦巷に身をおくと、にわかに違和感を覚えるというか、今の自分の状態を受け入れがたかった。

「ここで昼食摂りますね。私は今から売店でお昼の分買ってきます」

運転席に戻った待田君がミラー越しに笑いかけた。車中で勝手がちがった砂木子のおむつ替えは気恥ずかしかったのか、笑顔が引きつっているように見えた。

「私の分は?」

砂木子は訴えるように問うた。

「持参した流動食がありますよ。売店から戻った後、何とか食べさせてあげますよ」

「私の分も買ってきてくれない? パンでもいいから」
こんなところまで来て、流動食など見たくもない……。

「え? 噛めますか」

便利な流動食があるから噛まなくてよかったのだと言いかけて、「噛めるよ。やわらかいパンをお願いね」と頼んだ。